

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8501  
京都市左京区吉田本町  
075-753-5270  
www.rakuyukai.org

## 日本の原子力五〇年

東北支部長 井上 茂 (昭48年卒)



昨年六月の洛友会役員会の折に、学生時代に暮らした洛北の松ヶ崎を訪れました。入学した一九六九年当時は水田の残る田園地帯でしたが、二階に下宿のあった倉庫の場所は地下鉄松ヶ崎駅になっていました。しかし、一歩裏を歩くと、五山送り火の「妙法」の山の麓に、豊かな用水路と農家のたたずまいの風情が残っていました。ここに限らず、京都には高度成長の時代を潜ってきた割には懐かしい風情がよく残されており、寺社に限らず

歴史風土の維持に地域の方々が努力して来ていることを感じました。  
第一次ベビーブーム世代が大いに一堂に会した私の学生時代は、日本中が学園紛争の真ただ中の状況でした。京大でも入学式は混乱の中で式典は行えず、授業は秋まで始まりませんでした。その後も封鎖やストライキが度々あり、卒業式はありませんでした。そんな中で就職に際しては電力会社と決めたのですが、故郷の東京戻るか、関西に残るか、縁のない東北に行くかに迷い、結局は東北を選びました。何故東北にしたのか、今となっては記憶が定かではありませんが、東北へのよい印象が背景にあったのかと思います。それは、二回生の夏休みの三週間の東北一周無銭旅行のことで、東

京北千住からヒッチハイクをスタート、国道4号(奥州街道)を北上し青森へ、そして日本海側を回るルートの旅でした。北に行くほど人情も深まり、簡単に車に乗せてもらうことが出来、時には自宅で食事の振舞いを受けたり、客用布団に泊めてもらったことなど良い印象が多く残っています。電力会社希望の動機は、当時システム理論が熟し始めた電力系統の業務に携わることでした。しかし、配属は思いもよらなかった原子力畑で、やがては希望が通ると思いましたが変わることはありませんでした。  
日本初の商用原子力は東海発電所で、一九六六年に運転開始し昨年で丁度五〇年が経過しています。ここで、私が経験して来た日本の原子力の歩みを、私なりに導入、改良、高度化、成熟、再興の5つの時代に区切り振り返ってみたいと思います。

初号炉は英国から導入のガス炉でしたが、大容量化には適さず以降は米国から導入の軽水炉になり、一九七〇年運転開始の敦賀1号から始まり、美浜1号、福島1号と続きます。2ないし3号炉以降は次第に主契約者を国内メーカーに代えて行きます。米国の設計は基準に始まり体系的、論理的に下流の仕様を固める手法で流石はとうなずかせる技術でしたが、私が入社した一九七三年当時は、実証済みの技術との売込みにも拘わらず、これらの発電所において、予想外に種々のトラブルが発生し稼働率が下がっていた時代でした。  
これらの課題を受け昭和五〇年代に当たる一九七六年からの一〇年間は、導入技術の消化から踏み出し、自主技術による改良を目指した時代でした。国、電力会社、プラントメーカーはプロジェクトを立ち上げ、材料の改良、自動化・遠隔化などに取り組み、成果は運転中そして新設の発電所に取り入れられトラブルは大きく低減しました。また、一九七九年に起きたスリーマイル事故を教訓とし、ヒューマンエラー対策や品質保証などソフト面の充実も図られた時代でした。

続く昭和六〇年代、平成初期に当たる一九八六年のから一九九五年までの一〇年間は、技術が高度化し大いに進歩した時代でした。蓄積した経験の活用、改良材料、エレクトロニクス技術の導入などにより信頼性、運転性、作業性が向上し稼働率が上昇します。特にデジタル技術は制御系の世界を大きく変えました。この頃はジャパン・アズ・ナンバーワンの時代で、日本の原子力技術は世界一という意識を関係者は持つようになります。トラブルが減り信頼性が高まったことを、安全の証と捉えた面があったように思います。  
一九七六年から一九九五年までの二〇年間に、日本では三七基と実に年平均2基の原子力発電所が新設され、技術が大幅に進歩し人材の育成が一気に進んだ時代でした。

会報のメール通知サービス  
登録受付中

「印刷された会報は要らない。パソコンで読む。環境保護に協力する。」という会員の皆様に、会報の発行をメールでお知らせするサービスを開始しました。  
ご希望の方は、「会報メール通知希望」とお名前を 洛友会 e-rakuyuu@kuee.kyoto-u.ac.jp へお送りください。  
併せて、技術広報誌 cue のメール通知サービスも受け付けております。

二五年を超える経年化炉への対応、使用済燃料から回収するプルトニウムの活用などが直面する課題となります。電力会社は保全技術の開発、定期検査期間の短縮に努力を傾注し、平均稼働率は八〇%を超えます。しかし一方で、ウラン加工施設での臨界事故の発生や、自主点検データ不正の発覚など、一九八六年のチェルノブイル事故を教訓に世界に提唱された安全文化が、日本ではまだ未成熟だった面も顕れて来ました。この対応として、経営トップの安全保安に関するマネジメント責任をより課す制度が採用されました。

そして二〇一一年三月、津波に起因し電源や冷却ポンプを喪失し炉心溶融や水素爆発に至る福島第一事故が発生します。浜通り地域に放射性物質の汚染をひろげ、今も多くの方々が避難を余儀なくされています。日本は高い原子力技術を構築しましたが、その中にも安全に関する視点に不足があり事故の発生を避けることが出来ませんでした。事故後6年が経過しますが、新しい規制基準への適合など再稼働に向けた取組みを進める原子力再興の時代が続いています。事故の反省は新しい規制基準に

全て盛り込まれていると考えてよいと思います。地震など自然災害、火災、停電などへの耐久性を強化し、さらに、重大な事故やテロ・航空機衝突に対処する設備や体制・手順を求めるものです。

現在、私は東北電力を退社し、昨秋から青森県で使用済燃料の再処理関連の事業に携わっています。むつ小川原開発が計画された六ヶ所村に、厳しい対立の中で原子燃料サイクル施設の立地が受け入れられたのは一九八五年であり、三二年が経過しています。国の政策への協力と地域産業の発展を願っての受け入れでした。ウラン濃縮工場、低レベル廃棄物埋設施設が一九九二年に操業を始め、現在は中核となる再処理施設の工事が行われています。再処理工場は一九九三年に着工しましたが、ガラス固化試験のトラブル、新規基準対応などで竣工が遅延していました。ようやく用途が見えて来ています。平和利用が明確で技術立国の日本が再処理関連技術を持することは、世界に貢献することだと思います。

併せて、青森県は一次産業が豊かな地ですが、二次産業が少なく若者の流出が続いており、再処理に関連する産業を定着させ、働き場所を創出することが青森

県の発展につながると考えています。最後にありますが、入社当時の洛友会東北支部総会には多くの出席がありました。今は寂しい状況となっています。また、昨年の出席者の出身は全員が東北以外でした。東北にいと京都が遠くに感じられます。京都大学の魅力を東北の地にも発信し多くの学生を集めていただければと思います。

**教室だより**

**第13回電気電子工学科交流会の開催**

本年度も電気電子工学科交流会(電電交流会)が開催されましたのでご報告申し上げます。今回で13回目となりました電電交流会は2月17日(金)の夜、京都大学吉田南キャンパス内の吉田食堂で開催されました。電電交流会は例年、研究室配属を控えた電気電子工学科の3回生が教員の方々と親睦を深めるために開催されており。その運営は電気電子工学科の3、4回生の有志が中心となって企画しており、先生方と洛友会からの多大なご協力をいただいております。

その結果、本年度も学生と先生の交流の場を設けるといふ役目を果たすことができました。交流会は先生方と学生による対面での立食パーティの形式で開催されました。当初こそ学生からは緊張した面持ちが感じられましたが、先生方の気軽な語り口により徐々に話が弾んでいくようでした。学生も先生方も絶えず会話が進み、終始和やかな雰囲気漂う素晴らしい会となりました。参加した学生からは「気軽に話すことができた」、「先生方への印象が変わった」という声や「研究室配属の話だけでなく先生方の学問への真摯な姿勢や卒業後の進路の話など普段ではできない会話をすることができた」など総じて好評な感想を聞くことができました。

こうした会の開催に携われたことに運営者一同深く感謝しております。すでに来年度の開催に向かって後輩への引継ぎを行っており、今後もより多くの学生と先生方の交流を深める一助となるべく今後も活動を行ってまいります。最後になりましたが、交流会にご参加あるいはご協力いただいたすべての先生方、学生に心より感謝申し上げます。また、交流会の趣旨にご賛同

ただき、例年の開催にご援助をいただいております洛友会に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

第13回交流会実行委員会会長  
山森聡(平29年卒) 記



**電気系修士学位授与式**

平成29年3月23日(木)に大学院学位授与式がみやこメッセで、引き続き電気系修士学位授与式が桂キャンパスで執り行われました。70名の方々が晴れて修士(工学)とられました。



電気工学専攻37名

蟻正悟史、伊藤達哉、入山周平、岩堀太紀、河口慈、木村琢也、國兼範昭、黒柳貴夫、兒島清志朗、小島史嵩、齋藤司、坂洋輔、阪下真紀、坂田優樹、佐孝恭一、佐々木正義、佐段田裕平、高橋誠也、反甫透、辻浩季、手島彰吾、豊田真希、永井拓未、柳楽勇士、西村泰河、平山啓太、馬見新友輝、水野史崇、三谷敦己、宮川岳士、持山志宇、依田学樹、李文亮、王策、Kiss Daniel、CHOI YONG WOO、宮崎大志

電子工学専攻33名

内田昌志、大友健郎、小野裕介、菊田智寛、岸元克浩、木戸峻平、清原孝行、熊本涼平、栗山豊、齋藤栄治、澤田直暉、重松英、清水友規、神野莉衣奈、末澤舜、菅野駿太、堤達紀、土居卓司、友松駿介、中川翔太、西和哉、羽路祐紀、平井和斗、松田祥伸、松村威哉、宮本真之、元平暉人、安彦修、山岡昌貴、山下貴裕、山下尚人、山下尚也、吉田昌宏

卒業生歓送会

平成29年3月24日、電気電子工学科の卒業生歓送会（洛友会との共催）が開催されました。みやこめっせにおける全学の卒業式に引き続き、電気総合館大講義室での学位記伝達式が行われ、守倉正博学科長より卒業生一人一人に対して学位記が手渡されました。引き続き、南部生協吉田食堂2階にて、荒木光彦洛友会幹事長の挨拶の後、教職員を交えての歓談が行われ、名残惜しさのなか卒業生が巣立って行きました。



教員の異動

昇任

- （平成28年6月1日付）
  - 電子工学専攻 岡本 亮 准教授（応用量子物性）助教より
- （平成28年7月1日付）
  - 電気工学専攻 美船 健 講師（電磁エネルギー工学）助教より
- （平成28年10月1日付）
  - 電子工学専攻 安藤裕一郎 特任准教授（極微電子工学）助教より

着任

- （平成28年7月1日付）
    - 電子工学専攻 小林 圭 准教授（電子材料物性工学）
  - （平成28年10月1日付）
    - 電気工学専攻 奥田 貴史 助教（先端電気システム論）
  - 電子工学専攻 Menaka De Zoyza 講師（光子電子工学）
  - （平成29年3月1日付）
    - 通信情報システム専攻 大木 英司 教授（知的通信網）
- 退職  
（平成29年3月31日付）  
電子工学専攻 辻 博司 助教（極微電子工

学

- 生存圏研究所 津田 敏隆 教授（地球大気計測）
- 転出  
（平成29年3月31日付）
  - 電子工学専攻 須田 淳 准教授（半導体物性工学）名古屋大学
  - 通信情報システム専攻 土谷 亮 助教（大規模集積回路）滋賀県立大学
  - システム科学専攻 前田 新一 助教（論理生命科学）(株)Preferred Networks

平成28年度卒業生の進学就職状況について（報告）

- 電気工学専攻長 土居 伸二
- 電子工学専攻長 山田 啓文
- 通信情報システム専攻長 佐藤 亨
- 電気電子工学科長 守倉 正博

平成28年度の電気系教室卒業生の進学就職状況についてご報告いたします。まず最初に、今年度の就職に際しましても洛友会会員諸兄諸姉より例年と変わらぬ多大なご支援を賜りました

結果、就職希望学生の就職が無事に決定致しましたことに関して心から御礼申し上げます。

平成28年度の電気電子工学科(学部)ならびに工学研究科電気工学専攻、同電子工学専攻および情報学研究科通信情報システム専攻(以上修士)の進学・就職状況を表に示しました。

まず、工学研究科電気工学専攻・電子工学専攻の進路・就職に關しましては、10名が博士後

期課程に進学し、62名が就職いたしました。産業界全般に亘って景気は若干上向いたものの経済的に厳しい状況が続く中、電気系教室に対して非常に多くの

企業から以前と変わらぬ学校推薦枠を頂戴し、最終的には、ほぼ100%の就職率を得ることができました。就職先は、電気

関連が多いものの、重工業メーカーや機械・自動車関係が人気で、

昨年引き続き多い状況です。また、電力関係への学生の就職

数も例年同様に推移しています。本年も、学校推薦を希望する学

生は多く、約8割の学生が学校推薦枠により就職しています。

また、電気系の推薦に対する考え方を御理解いただき、今年度から推薦枠を設定される企業もあり、実際採用されました。

また、表1には記載しておりま

せんが、博士後期課程については約半数が民間企業に就職、半数が大学の助教・博士研究員等に採用されており、博士後期課程学生に關しても企業も積極的に間口を拡げてくださっている印象です。博士後期課程については、修士から5年一貫の連携教育プログラムを生かして博士後期3年を1年〜2年で期間短縮修了する学生も出るようになって

情報学研究科通信情報システム専攻および電気電子工学科に關しまして、同様に多くの学校推薦枠を頂戴し、また見学会

等OB・OGの方々の強力なご支援により、多くの学生が当初より希望する企業に就職しております。特に、学部卒で就職を

する学生のために、推薦枠を修士と独立に設けていただいている企業もあり、大変ありがたく

思いました。内訳をみますと、専攻の専門性から少し距離のある、ソフトウェア、金融、サー

ビスプロバイダ等の業種にチャレンジする学生も見受けられますが、通信インフラ関係の企業

と総合電機メーカーへの就職が今年も多くなっています。震災以降、新聞やテレビ等で、通信

および電気電子が社会基盤に果たす役割の大きさが何かと話題

平成28年度卒業生進学就職状況

工学研究科(電気工学、電子工学)、情報学研究科(通信情報システム)、電気電子工学科

修了、卒業生数	修士	学部	進学・就職先
進学	10 3		京都大学工学研究科電気系専攻博士後期課程 京都大学情報学研究科通信情報システム専攻博士後期課程 64 京都大学工学研究科電気系専攻修士課程 28 京都大学情報学研究科通信情報システム専攻修士課程 8 京都大学情報学研究科知能情報学専攻修士課程 4 京都大学情報学研究科システム科学専攻修士課程 1 京都大学情報学研究科先端数理科学専攻修士課程 14 京都大学エネルギー科学研究科修士課程 1 奈良先端科学技術大学院大学 1 大阪大学生命機能研究科 1 東京大学情報理工学系研究科修士課程 1 東京大学工学系研究科電気系修士課程
小計	13	123	
官公庁等		1	御所市
電気関連	24		富士通テン、古野電気、パナソニック、村田製作所、三菱電機、横河電機、日本電産、IHI、シャープ、ソニー、安川電機、日立製作所、小松製作所、浜松ホトニクス、日立ハイテクノロジーズ
通信・情報・放送	22	3	NTT東日本、NTT西日本、KDDI、NTTデータ、NTTドコモ、NTTコミュニケーションズ、ケイオプティコム、WebCrew、コーエーテックモ、凸版印刷、NHK、ヤフージャパン、Line、大広、DeNA
電力・ガス	6		関西電力、大阪ガス、電源開発、エネゲート
機械・自動車・鉄鋼・金属・造船	28	4	トヨタ自動車、豊田自動織機、日産自動車、ボッシュ、新日鐵住金、三菱重工業、川崎重工業、IHI、デンソー、クボタ、島津製作所、住友電気工業、古野電気、村田機械、キヤノン、スバルテクニカインターナショナル、ジャパン マリンユナイテッド、三井住友金属、イトーキ
運輸・鉄道	3	1	JR東海、JR西日本、阪急電鉄、阪神高速技術
金融・商社等	5	2	大和証券、野村総合研究所、三井住友銀行、モルガンスタンレー、日本生命、丸紅、福天商事
その他	6	3	アクセンチュア、シンプレクス、GMOペイメントゲートウェイ、コーソル、ミズノ、総合警備保障、ポストンコンサルティング
小計	94	14	
研究生・帰国等	7	1	研究生、留年
計	114	138	

となり、これが多少なりとも学生の志望に影響しているのではないかと考えております。また、自動車関連企業に就職する学生が増えてくる一方、業績回復への就職は少ない人数に留まっています。就職先分野にも産業界の状況が反映された形にはなっておりますが、卒業生はいずれも希望する企業に就職を決める事ができました。

以上、会員の皆様のご厚意とご配慮に心より感謝申し上げます。次第でございます。

会員寄稿

40年の研究生生活を振り返って

川原 崎雅敏

(昭50年卒・東京支部)

私の研究生生活も40年になりました。N T Tで27年、筑波大学で13年です。その中で特に記憶に残っていること、印象深かったことについて書いてみたいと思います。

N T T入社は1977年で、武蔵野電気通信研究所の交換方式研究室が最初の所属です。入社4年目にフランス郵電省

(P T T)で半年間の国費研修を行いました。これは当時、P T Tと日本の通産省が行っていた交換研修制度で、N T Tからは3名(業務系、事業系、研究系で各1名)が派遣されました。最初の3か月は語学研修でフランス語を勉強するだけ。後半3か月は技術研修で、P T Tの研究所(C N E T)やフランス国内各地にあるP T Tの機関を訪問しました。語学研修は午後3時には終わってしまうので、その後はコンサートや演劇に行き、週末は泊2日のエクスカージョンでモン・サンミシエルやロアール川の古城巡りなど、今から思えば夢のような生活を送っていました。これというの

も、仏政府が研修生のために廉価なチケットを提供してくれたためです。当時1フランは40円で、コメディ・フランセーズの鑑賞券が30フラン、週末の旅行が100フランですから、如何に優遇されていたか分かります。言語と文化を通じて外国人シンパを増やすという仏政府の政策だったのだと思います。後半3か月の技術研修では、最初の1か月はC N E Tで、需要予測に基づくネットワークの自動設計システムやフランス全土のネットワーク状態監視・表示システム等について話を聞き、ディスカッションを行いました。C N E Tでは、研究者の他に多くの研究補助者がおり、男女比は大体半々で、滞在時の上司も女性でした。また、大変な学歴社会で、エコール・ポリテクニクの卒業者は最速で昇進します。研究者毎に個室なのも特徴で、大部屋方式はフランス人には馴染まないようです。

N T T時代の次の話は、1989年から1992年の間、国連の標準化機関である国際電信電話諮問委員会(C C I T T)の第18研究グループ(S G X V I I I)でブロードバンドI S D N (B I I S D N)の国際標準化を担当したことです。S G X V I I Iは前の研究会期にI S D Nやデジタル同期ハイアラキー(S D H)の標準化を終え、この研究会期は音声・データ・映像のマルチメディア統合網としてB I I S D Nの標準化が目標でした。そこで、私はB I I S D Nのレポートに指名されました。レポートの仕事は、小グループの議長をやって報告を作成することです。初めて欧米人を部下にもって仕事をし、B I I S D N基本勧告13件のうち、2件(ネットワークとプロトコル参照モデル)を策定しま

した。B I I S D Nの標準化で特に印象に残っているのは、B I I S D Nの通信方式であるA T M (非同期転送モード)のセル長の議論です。A T Mは回線交換とパケット交換の中間的なもので、固定長のセルで情報転送します。欧州は短セル(32バイト)、アメリカとN T Tは長セル(64バイト)を主張しました。欧州はエコリーキャンセラを不要化して経済化したいので短セル、アメリカと日本は情報転送を効率化し、ヘッダに十分な機能を持たせるために長セルが望ましいというのが背景です。特にアメリカはA T MとM A N (都市域網)との整合性を、N T Tはヘッダにバーチャルパスの識別子を入れることを重視しました。1年くらい議論しましたが折り合えず、結局、情報領域長は48バイト、つまり32と64を足して2で割ることで決着しました。議論を尽くして最後は妥協する、これが国際標準化なのだ実感しました。

2004年にN T Tから筑波大学に移りました。国立大学の法人化がスタートした年です。大学では、社会に役立つ研究がしたい、社会が提起している問題に対して情報通信ネットワークを利用したソリューションを

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

提供したい、というスタンスで臨みました。このため、N T T時代からのネットワーク制御の研究に加え、医療・健康管理や安全・安心といった研究分野にもチャレンジしました。中でも、筑波大学病院との共同プロジェクトとして行った糖尿病管理支援システム(i S M B G)と心疾患監視警報システム(i H e a r t)は最も力を入れた研究です。糖尿病を始めたとする生活習慣病の診療はとても難しく、欲望や怠惰をコントロールしなければなりません。ヘルスケア携帯で、これをサポートしようと言うのがi S M B Gです。S M B Gというのは自己血糖測定のことですが、血糖値やインスリン投入量を携帯電話に入力し、そのデータを患者と医師で共有すると共に、管理状況を随時メールで患者に知らせるといふシステムです。これを試作して、糖尿病専門のクリニックで実証実験をやりました。しかし、その結果わかったことは、糖尿病患者は高齢者が多く、携帯電話を操作できないということでした。そこで、音声入力で血糖値を入力できるようにしました。W e bサービスを電話インタフェースを付与する汎用的な方式として国際会議で発表したところ、中々の反響

がありました。

次にやった心疾患監視支援システム(iHeart)は、ウェアラブル心電計を患者に装着させて心電データを解析し、異常時Bluetoothでスマートフォンにデータを送って警報を出すシステムです。患者の生活の質(QoL)を落とすことなく、日常臨床に対応できるシステムとして開発しました。ウェアラブルなのでノイズ対策が課題でしたが、運動時であっても波形解析が可能で、患者の不整脈も正確に検出することができました。この成果は論文化し、今でも良く参照されているようですが、実用化まで至らなかつたことは心残りです。

40年を通じて色々な人達との出会いがありました。N.T.T時代は海外の優秀な研究者と一緒に仕事できたこと、筑波大学



では、若い人達と過ごし、楽しい時間を持つことが最も印象的です。やはり、人との出会いが一番大切で、心に残るものだと感じます。

## 音楽のある人生

中西 隆昭

(昭60年卒・中部支部)

1985年に学部を卒業し、今の仕事に就き32年が経とうとしています。その間、仕事の上でも様々な山場がありました。なんとかやってこられたのも常に傍らに音楽の存在があったからではないかと考えています。

音楽といっても多種多様ですが、私の場合には、ギターを弾きながら気のあった仲間と歌を歌うこと、つまりバンド活動になります。

結果的に、今では、所謂「おやじバンド」状態ですが、ギターを弾き始めたのは、10代のころ、中学生時代にさかのぼります。

ギターを始めたきっかけはよくあるパターンで、自分からやりたいと思って始めたわけではなく、兄が飽きて放り出したフォークギターを拾ってしまったというパターンでした。中学1年のころでした。そして中学2

年のある日、衝撃的な出来事がありました。学園祭で同級生が結成したBEATLESのコピーバンドの演奏を目の当たりにしました。そのバンドに憧れて他の同級生たちとバンドの真似事をしました。満足できず、勇気を振り絞って、そのBEATLESバンドのリーダーのインターホンを押しました。もちろんギター持参

で。そして翌年の学園祭のステージでは、そのバンドで私がギターを弾いていました。実は、このバンドが現在もやっているおやじバンドの母体となるバンドなのです。その後、私とバンドリーダーの二人は同じ高校に入り、そこで出会った仲間とバンド活動を続けます。現在一緒にやっているメンバはこのときのメンバとなります。大学に入ったあたりは、音楽サークルに入り、そこで出会った仲間とバンド活動に没頭しました。当時、教養部の門を入らず左側に尚賢館という建物があり、そこがサークルの練習場となっていました。そこを拠点にしていた別の団体とはうまく共存して活動をしていました。11月祭や教育文化センターでの企画コンサート、ライブハウスでの活動等を実施しました。さらに、夏休み等の帰省時には、高校時代の仲間とも

バンド活動を続けました。まさに音楽三昧の生活でした。

大学卒業後、地元に戻り今の仕事に就きました。それと共に、高校時代、大学時代のバンド仲間、散りじりになりバンド活動は休止状態に。しかしながら音楽に対する熱はなかなか覚めず、一人で多重録音の世界に入っていきます。4から8個のトラックに別々に録音ができるレコーダを買って込み、部屋にこもって、ヘッドホン姿で楽器や歌を録音していきます。録音された音はヘッドホンにしか聞こえないので、傍から見るとさぞ滑稽だっただと思います。またこのころになると、資金にも少し余裕が出てきて学生時代に欲しくても買えなかったギターを何本か買い込むことになりました。BEATLESが'60年代当時に使っていたものと同じメーカーの同じ仕様のモデル、もちろん色も同じでないと気が済みません。他にもトラディショナルな結構高価なギターも。車の買い替えを見送り、代わりに？ギターを購入したこともありました。

そこから年月が経ち、今から10年ぐらい前に、各地に散りじりになっていた高校時代の同級生たちが、地元に戻ってくるようになり、近郊で同じように音楽活動をし

つ地元のライブハウスで活動を始めるようになります。音楽活動を通じて、仲間がどんどん増え、別のバンドへの参加の誘いも頂くようになり、複数のバンドで活動をするようになりました。あるバンドに参加したときに、こんな経験もしました。私を誘ってくれたバンドのリーダーが、ほぼ同時期に全く別バンドで誘っていたもう一人のメンバーが実は職場の後輩だったので。しかもその後輩とは普段めつたに話をしないのですが、バンドの誘いを受けた一週間ほど前に、たまたま話をする機会があり音楽の話をしたばかりでした。何か不思議な見えない繋がりのようなものを感じました。

こうして音楽活動を続けていくうちに、ライブイベント等で、近郊で同じように音楽活動をし





ている仲間たちとも知り合うようになりませぬ。また、交流の途絶えていた中学、高校時代の同級生達とも、地元でのライブ活動を通じて交流が始まったり、さらに、大学時代の音楽サークルの仲間とも定期的なOB会での交流も始まりませぬ。

こうした音楽を通じた仲間との交流のおかげで、それまでは決して社交的ではなく、どちらかというと出不精であった私が、いろんな場へ積極的に出ていくようになりませぬ。さらに、やりたいことはやりたいと思つた時にやるべきだと思つようになり、気が付くと人に対して一生懸命そのことを説いている自分がいたりませぬ。もともと出不精であった理由のひとつに、自分分は口下手で人と話をするのが苦手だという意識がありました。が、今では1時間の弾き語りのステージでトータル30分以上話

をしてしまふこともありませぬ。決して流暢ではありませんが、このように音楽活動により、近年の自分のプライベートの生活はとてもアクティブに変化し、さらに気持ちの上でも何歳も若返つた気がしています。元BEATLESのポール・マッカートニーは70歳でも現役で活躍しており、今年も来日すると聞いています。私も70歳超えても現役で音楽活動

を続けていられるように頑張つて行きたいと思っています。

### 11年ぶりの広島、自転車生活

伊藤 達理

(平22年卒・中国支部)

2月の異動で広島市内勤務となり、生まれ育つた地に帰つて来ませぬ。大学・大学院の6年間

間は京都市民、その後就職してからの5年間は倉敷市民であつたため、実に11年ぶりの広島市です。11年といえれば長いような短いような、なんだかよくわからない期間ですが、例えば11年前にはまだマツダスタジアムはなかつた、と言えれば月日の経過を実感できるかもしれませぬ。ちなみに、昨年の広島東洋カープの快進撃もあり、世間ではマツダスタジアムが定着している

ようですが、私の中では初代広島市民球場のイメージが強くあります。ただ、1年も過ぎれば慣れてしまふような気もします。これだけ期間を空けて生活を再開するといふ経験はこれまでになく、最初は様々な変化に戸惑うのではないかと半分構えるような、半分楽しむような心境でした。しかし、実際に暮らし始めた今、違和感にはほぼありません。大きな変化では例え

ば広島駅周辺がガラッと変わつていますが、これは現在進行系であり、楽しんで観察しているという方が近いでしょうか。細かい所では、例えばバスの待ち時間がスマホでわかるようになってい

る等、暮らしに密着したサービスが増え、便利になつてい

なあと感じています。個人的に興味を惹かれた変化として、スポーツサイクルの増加があります。実は近年、知る人ぞ知る自転車ブームであり、いわゆるママチャリではなく、もう少し本格的な自転車を購入する層が増えていませぬ。代表的なものとしては、舗装路での高速走行に適したロードバイク、未舗装路に適したマウンテンバイク、両者の中間であるクロスバイク、街乗り用のミニベロ(小径車)、変わり種としては寝そ

べつた格好で走るリカンベントなんてのもあります。広島だけではないと思ひますが、以前の状況を知つているからか、一気に増えたように感じませぬ。

広島市の中心部は比較的コンパクトにまとまつており、自転車でも十分回れますし、駐車場を探す手間・車庫入れ等にかか

る時間を考えると、車よりも自転車が機動性に優れていませぬ。スポーツサイクルであれば快適に走れるので、楽しさもあ

り、走つてみようという気になります。すると健康にも良いのでさらに走りたくなるという好循環。また、走行中に限れば、CO2排出はほぼありません。人にも環境にも優しい乗り物です。そんな流れに触発されたわけではありませぬが、私も自転車を新調しました。引越しが終わつて一息ついた休日、話を聞くだけのつもりで立ち寄つた自転車屋、気に入つたミニベロがあり、衝動買いでした。大学時代はロードバイクに乗つており、ミニベロは漕いでも漕いでも進まないというイメージがあつたのですが、スポーツタイプという

こともあり(ただしそれなりのお値段はしますが)、ちゃんと走ります。こうなると気軽に乗れるというメリットがすごく大きくあります。街乗りだけでなく、折りたたむので袋に詰めての交通機関での移動も楽です。上りもちゃんとこなせませぬ。比治山で試した感触なので本格的な峠では厳しいかもしれませぬが、何とかなると思ひませぬ。ただし、ホイール径が小さい自転車の宿命か、下りの安定感はありません。これは致し方ない所でしょう。

また、お店の人曰く、カスタムして遊ぶ人も多いようです。スポーツサイクルならではの柔軟性があるので、例えばフロントギアを複数枚に交換し、蟻螂の手のようなドロップハンドルに置き換え、細いタイヤに履き替え、ロードバイク寄りの仕様にすることも可能です。今はライトの取り付けくらいしかしていませんが、飽きてきたらカスタマイズも良いかもしれませぬ。悩みの種は、現在の住まいに駐輪場がなく、室内にすでにロードバイクがあるにもかかわらず購入したので、スペースを圧迫していることです。折りたたむので長さを取らず、部屋の動線を確保できるのは助かりますが、それなりに圧迫感があります。そして、自転車人口が増えるのは喜ばしいことなのですが、

その分、ルールを守らない、乱暴な運転をする人も多く目につきます。スピードを一切緩めずに交差点に突っ込んできたり、深夜の無灯火運転、車道での逆走等、ヒヤリとする場面は多いです。対自動車、対歩行者だけでなく、自転車対自転車の事故リスクも高いように思います。最近では自転車保険の選択肢も増えていますし、加入しておいた方が安心です。

不安な点もいくつかあります。が、ミニベロには良い意味で予想を裏切られました。今後の計画として、暖かくなった頃、少し遠出を試みようと考えています。しばらく車に頼っていたので確実に体力は落ちていますが、そこそこの距離、片道30km程度（広島市〜呉市がその程度だったと記憶しています）から始めてみるつもりです。峠道は避けて、けれども平地ばかりで



は面白味がないので何かしらアクセントを加えて、と地図を眺めていると、知っている土地でも変わったスポットを見つけたりするので面白いです。計画だけ立てて満足しないよう気をつけたいといけません。

### 庭木の手入れ

北 直樹

(平14年卒)

ミニベロに限らず、新たな地での新たな生活、そこにスポーツサイクルが加われれば楽しみも倍増です。みなさんも自転車生活、いかがですか？

二〇一三年十二月に庭付きの中古住宅を購入し、社宅から移り住んだ。前の住人が植えていた庭木をそのまま受け継いでいる。庭木は、レモン、ハッサク、ビワ、キンモクセイ、ゲッケイジュ（ローリエ）がそれぞれ一本ずつといまだに正体がわからない木が一本である。正体不明の木は、手入れが悪いのか花が咲かない。他は果実がなるものが三本であり、ローリエは葉が香辛料になる。キンモクセイは芳香剤として使える。正体不明を含めて常緑の広葉樹ばかりなので見た目の面白さはないが、先住人がきわめて実用的なもの



を植えてくれていたことを大変ありがたく思う。以下、一番手のかかるレモンを中心に、これまで庭木をどのように世話してきたかを述べる。私は記憶のある限りこれまで庭木をいじることはなかった。そのため新たに得るところがあまりない文章になると思われるがご容赦願いたい。

レモンの木について、一年を通してやることを述べる。一、二月はあまりやることはない。二月末に肥料をやる程度である。三月になると、ザクザクと剪定をしなければならぬ。五月になると花をつけ、とても良い香りが広がるが、花は摘まなくても良い（作業はない）。夏、青い実を適当に間引く（摘果）。残した実は袋をかけると良いらしいが、これはやったことがない。

また、夏から秋にかけて発生する新しい枝を、とにかく摘んでいく。十二月、成った実を収穫する。収穫した実は、一、三日乾燥させてから涼しいところに保

存する。また、一年を通じて、とげを見つければ次切り取って行く。

以上さりと書いたが、いまだに全部うまく出来たという感触はない。右に述べたように通常五月に花が咲くのだが、移り住んで初めて迎えた二〇一四年の春には花が咲かなかった。おそらく入居前に不動産業者が見た目をさっぱりさせるために、通常切らないときに剪定をしたためと思われる。実がつかなかったため入居してしばらくは何の木かわからず、とげが目立っていたのでカラタチではないかと勘違いした。そして冬に自分で剪定をした。これも時期が間違っていたため、翌年（二〇一五年）もほとんど花が咲かなかった。

しかし摘果が十分でなかったためか、実の大きさはまちまちで、見た目も黒い斑点が目立つものが多かった。二〇一七年二月現在の木の姿は、夏枝・秋枝をせつせと摘み取ったところは整っているが、手が届かなかったところははひよろりと長くて葉のまばらな枝がみつともなく出てしまっている。

そこでこれがレモンの木であることを教えてもらった。ようやく木の正体がわかったので、育て方の本を購入した。ほとんど花は咲かなかつたが、年末に初めて五個程度収穫できた。二〇一六年の三月、ようやく適切な時期に剪定をした。すると五月に順調に花をつけ、年末には広げた新聞紙四枚分にずらりと並べられるほどの実が収穫できた。

実際対峙するまでは知らなかったが、レモンはとげがあることなら触れたくはないが、成長の遅いと言われるかんきつ類らしくなく、どんどん新しい枝が伸びるので、剪定をしなければならぬ。気をつけていても何本か切っていると手に傷がついてしまっている。また、高い枝は切り落としても引つかかって地面に落ちてこない。脚立に乗っていると枝切り鋏などを置いて拗うことになるが、なかなか筋力を要する。さらに切り落とした枝は、束にするにもゴミ袋に入れるにも、とげを取り除く必要がある。そのため、まずは木から枝を切り落とすの一日、切り落とした枝を処理するの二、三日といった具合に、なかなか時間を要する。ただし、切り落とした枝葉からは、とてもさわやかな香りがする。



これは世話をしている当人しか味わえないものである。

庭木の世話をしても感じること、新たなことを知る楽しさである。レモンにとげがあることを知らなかったように、さまざまな事象を、身を持って知ることができている。例えばビワの実が初夏になるが、花は早いものではその前の年の十月ごろから咲き始める。その花はあまり大きくなく、色も控えめな白で目立たない。ビワの木は割と良く見かけるが、花はこのように地味なため、やはり自分の庭で見るとなると、初めて開花時期を知ることができた。別の例として、キンモクセイはわが家ではあまり日当たりの良くないところに植わっているが、そういった場所だと驚くほど花がつかない。そのため、キンモクセイもかなり長い間何の木かわからなかった。つぎに、このような知識をつけることによって、人との話題が増えた。春になると忙しいとか、剪定した枝はどこに捨てにいけるのか、仕事以外の話ができるのとはともうれしい。こういう話ができる年齢層が厚いことも良いところである。さらに、月並みではあるが、自然の営みの確かさ、力強さをより感じるこ

とできるようになった。月日がたつとつぼみが膨らみ、花が咲き、そして実をつける。ただ会社と家を往復する毎日の中でも、ふと庭木の変化を目にすることで、季節の移り変わりをより身近に感じていとおしく感じられるようになった。以前であれば不快に思うだけの雨降りの日でも、水やりができていと思えばプラスに考えることができていく。以上、個人的なことを書き散らしたが、これからも庭の木々を大事にしていきたいと思う。また、これを読んでくださった方々が、民家や公園に植わっている木々について、その季節ごとの変化に少しでも興味を持っていたら幸いです。

### 高大連携事業に関わって思うこと

星野 光

(平24年卒)

高大連携事業は、高等学校（高校）と大学が連携して高校生への教育に取り組む事業のことです。私はこれまで、博士後期課程（2017年3月修了見込）の学生として、本学が企画する高大連携事業に関わってきました。今回は、その取り組みを紹介させていただきますとともに、高校と大学



の教育の違いは何だろうかと思えたことについて述べさせて頂きます。考え足らずの部分や、論点を外していることが気になった場合にはご指摘、ご意見を頂けると幸いです (hoshino.hikaru34w@kyoto-u.jp)。

私がこれまで主に関わってきた高大連携事業の一つに「学びオーブン授業」というものがあります。本事業では、博士後期課程の学生やポスドクが、それぞれの専門性を活かした授業を担当します。高校生にとっては、日常の授業とは異なる形で勉強することで、高校における学びや進学の動機づけを行う機会とすることが期待されます。一方、授業を担当する大学院生にとっ

ていたのですが、(研究の心構えなど自分がどう言う立場にあるかは別として)そこにいる高校生や教員の方々が研究活動について真剣に考えているの不安に思ってしまったことがありました。他の類似の研究会ではそのように思うことはなかったですし、決してSSHや高大連携を否定するわけではないですが、高校の時点で本当に研究活動ができるのかと疑問に思いました。この点については、高大連携事業を担当する入試企画課の方とも意見交換させて頂きました。高校教員の中にも似たことを感じている方がいるというのを教えて頂きました。その要因の一つとして、高校段階での探求活動は学習指導要領との関係性においても十分でないということが指摘されているそうです。確かに、世界の先端を目指す研究活動を行うには、高校の学習指導要領の範囲では難しいのかもしれませんが、それだけが自分の中の違和感の原因ではないような気がしていました。

「答を見る前に」というのは、本学の工学部電気電子工学科に入った学生が最初に履修する専門科目である「自然現象と数学」の教科書の導入章のタイトルで

す。問題集の問題を解くときには、すぐに解答ページを見て答え合わせをするようではだめだ、ということが書かれています。将来専門家として取り組む実際の問題には解答集といったものはないので、自分自身でその正しさを検証できるようになりましょうということ。実際の問題には解答集がないというのをきちんと意識することは学生にとって必ずしも簡単ではないように思います。私の場合は、

学部の中にそれができていたかという自信がありません。所属していた体育会卓球部での練習に気持ちが向いてしまったこともあり、あまり深く考えず、授業で習う理論や解法を使えるようにして試験に備えるということを繰り返していました。その姿勢ではまずいと意識し出したのは、研究室に配属されたからのことです。思い返せば、高校時代に受けていた教育の中にも、すでにそこにつながる考え方はあったように思います。私が授業を受けていた数学の先生は、事あるごとに、数学で大事なのは考え方の手順を勉強することであって、将来答のない問題に挑戦するための練習をしているのだということを言っている

たことを思い出します。高校でも大学でもそういうことを言われていながら、真剣に考えだしたのは自分が研究活動に実際に関わるようになってからでした。

以上を振り返って考えてみると、前述の高大連携事業のときに感じた違和感は、通常の学習指導要領の範囲を超える内容を扱っていること自体で満足しているように見えてしまったからではないかと思えます。発展的な内容を知っているということ、自分が優位に立っているというのとは勘違いであって、自分が習っている外側にまだ誰も説明できていない現象がある、ということを知る目的として高校での研究活動が行われればよいと思えますし、高大連携事業はそれを促進する機会になりうると思えます。私の指導教員である引原教授からは、教育について、「学生を引っ張りあげるだけでなく、自分が踏み台にならないといけない」ということを言われたことがあります。高大連携事業を通して自分なりにその言葉が納得できた気がします。自分も誰かの踏み台としての役割を果たせるよう成長したいものです。

## 何時までもお元気で！

岩曾 弘三

(昭28年卒)

私は最後の旧制卒です。昔は多くの企業で60歳定年であったので、多くの級友は25年以上仕事から遠ざかっています。一方では、どの高校でも十八日会、三水会等、毎月この週に集まる任意組織を持つてきました。私は三回勤務先が代わり、69歳になって定常勤務が無くなったので、三高三木会への入会を勧誘され、しばらくして2002年から世話役を頼られました。人数を制限するために、三高では、卒業年次5年間に会を作っています。その時の会員数は130名余りでしたが、今は80名弱で、希望で参加される未亡人を含めると90名足らずです。私の下は三高に入学1年後に廃校となり新制大学を受験させられた人たちで全員85歳以上です。ここで、非常に顕著なことは、多い時は50名強が出席することもある会合に、京大電気同級生は6名中、毎回出席するのは、多くの人と接触してきた国鉄出身の級友とNTT出身の私のみです。偏見に満ちた判断ですが、工場勤務をした人は、毎日機械と対話することが仕事でした。

高校ですから同窓生は、元大学学長、首相顧問、ロシア大使、水産庁長官、東大医学部教授など多様な人々でありながら、同じ学校で同じような経験をした全員は対等ということ、会長もなく、敬称・敬語なしの気楽さで、長年世話をしていても卒業年次を覚えていない人が大多数です。本来は興味深い卓話を聞いたり、楽しい会話ができる場にもかかわらず、工場勤務の人にとっては対話が苦痛ではないかと思っています。私もラオスの電気通信20ヶ年計画を作成した直後の入会であったので「ラオス雑感」の話をし、その後、合計11回宅話をしました。7月は納涼、12月は忘年の集いを、銀座のレストランで開催します。数年前に、NHK・TVで老夫婦を訪問して、希望の曲を演奏する「ごきげん歌劇小劇場」番組が続きましたが、そこでアコーディオン男爵と呼ばれた人が出演しましたが、この人と歌手の奥さんに来てもらって、2時間に亘って独仏語のリードや寮歌を共に歌い、最後には出席の夫入方も含めて肩を組んで輪になり、琵琶湖周航歌を歌います。

国連の専門機関である電気通信連合のことです。メーカーの技術者と共にジュネーブの会議に出席したので、これらの人々とOB会を作りましたが、その人たちの趣味はパソコンの多くの機能を有効に使う技術の追求などで、対人的ではありません。若い洛友会会員の方も、是非、機械のみでなく、多様な人間と会話を交わす方法にも熱心になって、長い人生を充実させて欲しいと思います。旧制高校では、学生生活の環境や青春を称えたり、運動部を応援するなど各種の歌があり、三高の歌集・抜粋でも100以上の歌がありますが、校歌はありません。状況に応じて適切な歌を歌います。そのために各地で毎年全高校を対象とした寮歌祭が行われて、昨年の東京での寮歌祭には38校359名が参加しました。皆が戦後の復旧に努力し合った仲だとの連帯感を基に友好を高めました。例年のことですが、高校別に歌うのに対して、琵琶湖周航歌のみは例外で、全高校からの「愛好者」の出演として歌う形式となり、数十名が壇上を競い、三高卒は12名でしたが、壇上に登らせてもらえませんでした。

なお、琵琶湖湖畔の今津には「琵琶湖周航の歌資料館」があり、今年100年祭が催されます。また三高卒業生の多くが東大へ進学しています。三高は消滅したのであり京大へ併合されたのではありません。最近の京大同窓会などで、自分たちの歌のようになっているのに、三高卒業生で不快感を感じている人も多いためです。「国民歌」に制定される動きもあることで、誤解しないことが望まれます。なお、三高の寮歌には「琵琶湖に歌う」という、一層情緒的な歌もあります。

さらに話題は違いますが、ゴルフについて話させて頂きます。入社12年後に、一定の職位以上にある人は、2個のボールを2人づつの2組で打つゴルフを打つ競技に参加させられたのがゴルフの始まりでした。ゴルフに関心のない方には恐縮ですが、皆様が私の失敗を踏まないようにと願い、取り上げました。老年のために他に迷惑を掛けている人を見て、後述の外国の経験から、私は少し下手になった時に、ゴルフを止めました。しかし、徐々に迷惑ならば謝りながら続けるべきです。止めるは体力の低下に気づきます。元には戻せません。

50年前のカンボジアはフランスの植民地であったので、ゴルフはなく、40年前の英国は本場のために色々学びました。プレーするのに速度が大切でした。通常の3名1組でプレーをし、最後のパターも何と入りそうならば、Greenと言って入れなくて良かった。初心者には罰となるように、テークランドからフェヤウエイまでは荒れ地でした。セルフのために折り畳みのカートを自分で持参しました。夏は芝が枯れ勝ちで、冬の方がフェアウェイが弱いが青々としている芝生が傷むので、折り畳み式のバック立てをバックに付けて、担ぎました。有名なSt.AndrewsはSOUTH LINKと言われる通りに、海と住宅地の間をリンクするにある空き地を利用することからの用語です。老練なキャディーが付き、第1打でプレーヤーの腕を見抜いて、次に使うクラブを選んで渡されてしまいました。

30年前のマレーシアではゴルフ場は会員が運営するために、reciprocalと言って、会員代表が国内の複数のコースと協定を結び、自分のコース同等の条件でプレーができ、各種の料金は月に1回請求書が来ました。クエートは砂漠で小石がごろごろしているために、ボールは不規則に

飛び、小さなマットを持ち歩き、常にボールをその上に載せてショットしました。グリーンは細かな砂のために油で粘度を出し、パッティングごとにキャディーが布でならしました。アフリカの多くの国も到着時に、時差調整と称してゴルフをしましたが、グリーンはクエートのな所もありました。フィリピン、インドネシアなどでは、子供が即席のキャディーとなり、池にボールが入ると飛び込んで探さだしてチップを稼ぎました。

どの国でもスタートの予約は原則としてなく、英国ではスタートの所に僅かに傾いた小さなオープン用の樋があり、それぞれ自分のボールを入れて順番を待ちました。ブラジルは日系人が多いためか、スタート待ちの人が長蛇をなしていて、怖くなってプレーに参加する気持ちになりませんでした。

しょうが、私の方法を恥ずかしながら補足させて頂きます。まづ元氣な先輩を探して、及ばないながらも真似しようとしています。昨年もNHK・TVの1時間番組に3回出演した105歳の医師の生活ぶりや、宮内庁記者クラブ勤務を25年間して新聞社の幹部になった95歳の日本エッセイスト協会会長はいまだに記憶力が優れて明晰で、日銀副総裁などを同窓会の卓話に呼んでくるのを及ばずながら羨ましく思います。

私は上記の毎月の同窓会の業務に加えて、いまま途上国支援のNGOを支援しています。英国では、サッカーは労働者のゲームであり、スポーツは自分であるものであると言われるもので、スポーツを眺めるのは無駄な時間だと考えて、TVでは相撲と野球を優勝決定の瞬間しか見ません。同窓生も言うように、民放のTVは昔に比べて、どんな品を落としているので、海外情報以外は見ず、かつコマースナルをカットして観られるように録画します。ラジオはTVほど品の落しようがないので、朝6時から1時間の番組はお勧め番組です。フランス語が懐かしいので、TVとラジオの仏語講座を聴視し、機会があればフ

ランスへ行っていて60数箇所となります。昨年から公開された32,000年前の洞窟壁画も見に行きました。

報道の自由度が世界72位にまで落下した情報鎖国の日本の新聞は簡単に眺めて、スポーツ、殺人を掲載せず、世界を平等に報道するFinancial Timesを40年来読み、仕事で訪れた約50カ国を含む70ヶ国余の国情の変化を追い求めています。ラッシュ時の車内読み物としてTIME誌などは縦に折って読め、文字が細かいのでページも頻繁に変える必用が無いので好適です。私は外紙などの情報を元に、元勤務先の季刊の同窓会報に投稿していますが、4回では書ききれないので、最新の世界情報の抄訳を度々友人にメールしています。5月には88歳となりますが、その2週間ほど前にはブルガリ、マケドニアなどへ10日間の旅行をする予定です。

自己宣伝的になり、皆様を不



2015年5月 チェッコのチェスキー・クロムロフにて

支部だより

愉快にしたことに、深くお詫び
します。とにかく、それぞれに
適した、充実した人生を送りま
しょう。

第106回関西支部
ゴルフ競技会報告

プレー状況
第106回関西支部ゴルフ競
技会が平成28年10月15日(土)
武庫ノ台ゴルフコースにて開催
されました。

当日は天候にも恵まれ、アウ
トは福川氏(昭和30年卒)、イン
は伊藤氏(昭和34年卒)の始球
式でプレーを開始し、合計19名
(うちシニア8名)が競技に汗を
流されました。

- 結果は以下のとおりです。
(シニアの部)
優勝 平嶋 正芳 (S38年卒)
2位 伊藤 俊一 (S34年卒)
3位 西村 登努志 (S38年卒)
(一般の部)
優勝 福田 隆 (S57年卒)
2位 吉田 豊彦 (S56年卒)
3位 福島 敏 (H3年卒)

懇親会
プレー終了後、西田氏(S63
年卒)の司会により、表彰式兼
懇親会が開催されました。

懇親会では、優勝者に景品およ
び優勝カップが手渡されたあと、
平嶋氏(S36年卒)・福田氏
(S57年卒)より優勝報告を頂く
とともに、関西洛友会ならびに
ゴルフ競技会の更なる発展を期
待するコメントを頂きました。

洛友会関西支部では同窓生の
懇親を深める機会として毎年2
回(春・秋)にゴルフ競技会を
開催しております。次回は平成
29年5月20日(土)を予定して
おります。若い方も含めて、多
数の皆様のご参加をお待ちして
おります。



第106回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

支部総会のお知らせ

平成29年度の各支部総会は左
記の日程で開催されます。場所・
時間など詳細は各支部幹事の方
よりご案内があります。ふるっ
てご出席ください。

- 西田 篤史 (S63年卒)
糸崎 俊介 (H22年卒)
連絡先 050-7104-0914
(谷口)
itozaki.shunsuke@b3kepcoco.jp
5月20日(土) 北海道支部
連絡先: 佐野大輝氏
H2004033@epmail.hepcoco.jp
5月26日(金) 中国支部
連絡先: 平岡正憲氏
260857@pnet.energia.co.jp
5月26日(金) 九州支部
連絡先: 池田茂雄氏
shigeo\_ikedai@kyuden.co.jp
6月2日(金) 四国支部
連絡先: 繁樹真一郎氏
shigemasa15516@yonden.co.jp
6月3日(土) 北陸支部
連絡先: 笠川 隆氏
kasakawa.takash@rikyuden.co.jp
6月4日(日) 関西支部
連絡先: 沖 雅雄氏
Oki.Masao@dhmishishielectric.co.jp
6月17日(土) 中部支部

連絡先: 河野弘樹氏
Kouno.Hiroki@chuden.co.jp
6月25日(日) 東京支部
連絡先: 福原忠行氏
webmaster@rakyukai.org
開催日未定 東北支部
連絡先: 秋山康人氏
W840261@tohoku-epco.co.jp
事務局 記

松山隆司教授
追悼シンポジウムのご案内
昨年12月12日に急逝されまし
た松山隆司教授の追悼シンポジ
ウムを下記の日程にて行うこと
になりましたのでご案内申し上げ
ます。
日時: 平成29年6月3日(土)
午後1時半~午後7時
講演会 午後1時半~
午後4時半
懇話会 午後5時~
午後7時
会場: 京都大学医学部芝蘭会館
本館「稲盛ホール」
参加登録: http://visionknee.
kyodai.ac.jp/20170603/
主催 大学院情報学研究科知能
情報学専攻
工学部電気電子工学科
学術情報メディアセンター
情報環境機構
なおプログラムの詳細につき
ましては参加登録ページにて改
めてご案内申し上げます。

本部総会開催のお知らせ
平成29年度本部総会は左記によ
り開催されます。多数の方々のご
来場をお待ちいたしております。
記
日時: 平成29年6月25日(日)
東京支部総会終了後
場所: 学士会館
TEL 03-3292-15936
参加申込先:
東京支部幹事
webmaster@rakyukai.org
※学生員及び本年3月に卒業さ
れた方は懇親会費無料です。

訃報
昭14 細田 清行 29.1.31
昭21 杉村 英男 29.1.5
昭21 武田 博之 28.11.29
昭21 原田 常夫 27.8
昭21 藤原 孝造 29.1.20
昭24 吉田 祝雄 29.2.4
昭28 野口 透 28.12.21
昭39 成久 洋之 28.6.6
昭39 水溪寿右衛 28.12.27
昭48 石井日出男 29.1.16
以上の方々をご逝去なさいました。
謹んで哀悼の意を表します。